

T・トルスタヤ『クイシ』における神話化の機能と剥き出しのメタファー

高柳聡子

物語内部における神話化の機能

『クイシ』では、小説の舞台となっている都市国家の支配者フョードル・クジミチが、一般市民には禁止されている過去の印刷物を隠し持ち、それを自分の創作物として発表している、という設定になっている。主人公ベネジクトは、この支配者を崇拜しており、彼の創作物とされる文学作品や法令を清書する筆耕として日々を過ごしている。ここに見られるのは、言葉を牛耳る支配者を闇雲に信じることによって、自らの「神話」を作り出していく主人公の姿だ。この神話化は、テキスト上でさらに支配者がさまざまに言い換えられることで発展していく。支配者フョードル・クジミチは、主人公によって「火をもたらした」「車輪を考え出した」「文字を教えてくれた」人物だと言われ、ほんの数行で神話的人物へと押し上げられていく。このような神話化の手法は、トルスタヤの短編の創作においても用いられてきた。これについてはリボベツキイも指摘しており、『奇術師』において主人公ガーリヤが、その意識と言葉の中において大嘘つきのフィーリンを神話化していく過程を例に挙げている(2:36)。ここでもフィーリンがガーリヤによって「サルタン」「全能のご主人様」と言い換えられていく。嘘、あるいは剽窃という行為を基盤に生まれた神話は、しかし我々読者の目を通過することはできない。自分勝手な神話の中に身を置く主人公の姿が生み出すものは他でもないイロニーとなって作品の中で機能し始める。例えば、『クイシ』においては、フョードル・クジミチが人間に火をもたらした、とプロメテウスの比喻として提示されているように思える。しかし実は、この物語の中での火の役割は極めてネガティブなものなのだ。主人公は自分の小屋での火の確保に日々苦勞しており、たびたび火種を絶やしてしまう。また、物語のラストで火の海と化し消滅する都市国家という設定も挙げることもできる。支配者によってもたらされたはずの火は、人々を豊かにするどころか、その生活を束縛し、最後には小説の舞台すべてを消し去るものとして描かれている。言葉のレベルで神話化された支配者は、小説内部の現実とは相反しているのだ。

また、火をもたらした人という提示は、「支配者フョードル・クジミチはプロメテウスだ」という隠喩としてではなく、「フョードル・クジミチが火をもたらした」という虚構として表現されている。これが隠喩として表現されれば、支配者の神話性は保証されたかもしれない。しかし、あくまでも虚構＝剽窃の裏付けとなっており、騙されている主人公を再確認させるものとなっている。

剥き出しのメタファー

T・トルスタヤは、メタファーを巧みに用いる作家として高く評価されている。短編の創作においては、キーメタファーと呼ぶことのできる大きなメタファーをまず提示し、それを前提として物語が展開していく。『クイシ』では、まず表題にもなっているこの「クイシ：Кысь」という語の隠喩性から考えてみたい。

まず、「クイシ」という語は、「к」と「ы」という現在ロシア語の正書法には則っていな

い綴りからなっている。このことは「クイシ」という生き物が物語の中で、姿を現すことのない鳥のような未知の生き物、その鳴き声だけで存在するという側面に対応している。また、この生き物がなんらかの規範を逸脱しているのではないかという予想を促すものでもある。作品の中で、数回「クイシ」が登場する場面があるかのように思われるが、実は「クイシ」は登場しておらず、「クイシ」という語が用いられたにすぎない。つまり、「クイシ」は言葉のレベルだけで存在しているのだ。「誰も見たことがない」「姿なきクイシ」と表現されているが、それを裏付けるように博識のニキータ老人はクイシの存在など信じておらず、主人公だけがなぜか非常に恐れており、その存在を常に怯えている。それは、クイシが「人間に背後から飛び掛って理性を奪う」からだという。だが、ここで気付くことは、「クイシ」という語はこの物語の表題でありながら実体としては存在せず、主人公ベネジクトの語彙の中にのみ生きているということだ。

こうした物語内の設定を念頭において次の場面を考えてみたい。まず、主人公がプーシキンの姿を紙に描く場面である。彼はプーシキンの巻き毛をアルファベットのCの文字で埋めていく。

Идола. Как его рисовать-то...

...Головку вывол ссутуленную. Вокруг головки-кудерьки : ляп, ляп, ляп. Вроде букву《C》, а по-научноиу :《слово》. Так... Нос долгий. Личико. С боков-бакенбарды. Позакалякать, чтобы потолще. Точка, точка-глазыньки. Сюда локоть. Шесть пальчиков. Вокруг : фур, фур, фур --- это будто кафтан.

偶像。どう描くんだろう。

前かがみの頭を丹念に書いた。頭の周りには巻き毛だ、くる、くる、くるっと。Cの字みたい。学術的に言うと《コトバ》だ。それから、鼻は長く。小さい顔。両脇に頬ひげ。点、点、と目。こっちはひじ。六本の指。周りは、ふわ、ふわ、ふわっと、カフタンみたいに。似てる。(1 : 300)

アルファベットCはロシア語では「Слово : 言葉」を表すことができ、プーシキンの頭部は多くの「言葉」で覆われることとなる。また、革命を起こさんと支配者の屋敷に忍び込んだ主人公が、壁に映った自分の影を見る場面も同様の現象が起きている。

Тени, как гигантские буквицы, плясали по стенаи, --- 《глаголь》 крюка, 《люди》 острого колпака Бенедикта, 《живете》 растопыренных осторожных пальцев, ошупывающих стены, шарящих в поисках потайных дверей.

巨大な文字のような影が壁で踊っていた。鉤の《Г》に、ベネジクトの先の尖った帽子の《Л》、秘密の扉を探りながら、壁をあちこち触っている、ぴんと広げられた用心深い指の《Ж》。(1 : 344)

白い壁に映った自分の影に、アルファベットの文字を発見するという主人公の身体の二次元化は、紙に描かれたプーシキンのそれと重なっていく。人間の身体は次元を二次元化されると同時に文字 (= 言葉) に寄生されてしまう。つまり、文字に飛び掛られた身体にな

っているのだ。

また、物語の後半部で、自分を見失った主人公は、なぜだか「僕は何者だ？クイシか？」
「違う、僕はクイシじゃない！」という自問自答をする。主人公のクイシへの恐怖と反発は、やがてくる文字による自らの身体への侵食の予感から生じているのではないだろうか。つまり、主人公の語彙の中においてのみ登場する「クイシ」は「言葉」のメタファーなのではないかと説明することができる。物語の後半部で、言葉に寄生される身体を持つ主人公、また「姿なきクイシ」との同一化への疑問が、物語の初めから提示されているということになる。

このように、言葉についての物語であることを提示しながら（それはまたロシア語のアルファベットで成る目次にも明らかに表されている）この長編小説は始まる。しかし、小説の内部におけるその他のメタファーはこのようなものではない。『クイシ』の中では、メタファーが十分に機能していないのだ。いくつかのキーワードを挙げてそのことを確認してみたい。

まず、地下にはびこるネズミは、主人公ベネジクトの、あるいは人間のメタファーとしてとらえることができる。物語の途中で突然に尻尾が生えてしまうベネジクトの姿は、明らかにネズミのそれと重なり合う。また、キリストを思わせる老人ニキータは、磔にされ処刑される。死後まもなく彼はベネジクトの前に姿を復活し、最後の言葉を残して昇天していく。この老人が彫ったプーシキン像は「芸術の復興のため」だと明言されてしまい、シンボル化を強いられはするものの、芸術そのものを解する者がいないために、シンボルになりきれない。ネズミが人間の、老人はキリストの、プーシキンは文学の、メタファーだろうと思わせながら、その照応はあまりにもあからさまであり、さらにはそれを裏打ちするディテールが明確すぎるために隠喩になりきれしていない。読者はそれらふたつの対象の間に隠された新たな類似性を見抜く必要がないのだ。こういった手法は、トルスタヤの創作において、短編の中でもみつけることができる。『マンモス狩り』における「結婚」と「狩り」、『可愛いシューラ』や『ペテルです』における「人生」と「四季」などである。

メタファーを提示することで、比較されたふたつの対象の間に新たな類似性を見いだすという一般的な作用は、上記のような場面では発揮されない。それは使い古された比喩であるにもかかわらず、トルスタヤによってわざわざ表現されている。

トルスタヤのメタファーの特徴として最後に付け加えておきたいのは、登場人物までもが隠喩的存在であるということだ。このことについては、H・ゴスチロも言及している。ゴスチロは『クイシ』発表以前のトルスタヤの短編の創作について論じた著書の中で、『オッケルヴィル川』を例に挙げ、モノを書く主人公という系列を通して、主人公シメオーフは『青銅の騎士』のエヴゲーニーや『外套』のアカーキーのメタファーとなっており、年老いて醜く太った女性歌手ヴェーラはアフマートヴァのメタファーであると述べている（3：160）。この意見に賛同するとすれば、『クイシ』の主人公である筆耕のベネジクトもちろんエヴゲーニー、アカーキーの系列に繋がるであろうし、その他の登場人物についても先に挙げたニキータ老人を始め、フョードル・クジミチという名もアレクサンドル世の隠遁後の名として読み取ることもできる。

このように、トルスタヤのメタファーは、新たな視点を与えるためのものではなく、イメージの二重化、あるいは他のテキストの想起を促すものとして機能しているように思え

る。メタファーの表現が、視覚的なものではなく、あくまでも言葉のレベルのものであることも見逃すことはできない。しかしそれは、トルスタヤに限ったことではなく、現代の女性作家に共通して見られる現象ではないか、ということが今後の課題である。

< テクスト・参考文献 >

1. Толстая,Т. Кысь.М. : Подкова,2000.
2. М,Липовецкий. Современная русская литература.М : УРСС,2001.
3. Helena Goscilo. The Explosive World of Tatyana.N.Tolstaya'sFiction. N.Y.:M.E.Sharpe.1997.
4. タチヤーナ・トルスタヤ『金色の玄関に』沼野充義、沼野恭子訳 新潮社 1995
5. 滝浦静雄『メタファーの現象学』世界書院 1988